

## 授業探訪

総合系科目・学びの精神「なぜ外国語を学ぶのか？」

# 複言語・複文化主義入門：外国語学習の意義を考え、面白さに気づく

外国語教育研究センター准教授 町 沙恵子

## はじめに

2025年度より、外国語教育研究センター提供科目「なぜ外国語を学ぶのか？～複言語・複文化主義入門～」が開講されました。

「複言語・複文化主義」とは、言語と文化の多様性に満ちた現代のグローバル社会において、個人が持つ様々な言語能力や文化的経験を「複合的な能力」として捉え、それを育み、尊重するという考え方です。もともとは多言語社会であるヨーロッパで生まれた概念ですが、グローバル化が進む今日では世界各地の外国語教育で重要な理念として位置づけられています。立教大学では英語（言語 A）に加えて初修外国語（言語 B）の学修を必修としており、本科目は、複数の外国語や文化を学ぶ意義を多角的に考察し、履修者一人一人が自らのユニークな言語的・文化的資質をどのように社会へ還元していくかを見出すことを目的として開設されました。

本科目は池袋・新座の両キャンパスで1コマずつ開講され、私が担当した池袋キャンパスの授業では、複言語・複文化の基本概念、世界の言語文化を取り巻く現状、多様なコミュニケーションのあり方、複数言語を学ぶことの利点などの幅広いテーマを取り上げました。履修者は114名と大規模なクラスでしたが、外国語学習や異文化コミュニケーションへの関心が高い学生が多く、毎回のグループディスカッションは非常に活発でした。以下では、各回のテーマや活動内容に加え、学生の主体的な参加を促すために私が工夫した点を紹介します。

## 各回のテーマと活動内容

### ●第1回「イントロダクションー複言語・複文化主義とは？」

多くの履修者にとってあまり馴染みのない「複言語・複文化主義」を紹介し、多言語主義との違いを取り上げながら、一人一人が言語学習や文化的体験を重ねて身につけるユニークな能力の可能性について考えました。



講義の様子。学生には毎週スライドと対応したハンドアウトを用意しました。  
熱心に手書きでメモを取る姿が見られました。

### ●第2回「多言語社会ヨーロッパの現状と言語政策」

ヨーロッパ連合（EU）の政策の1つである多言語主義を取り上げました。EUではすべての市民に自分の母語を話す権利が認められており、それを尊重するためにEU加盟国の公用語すべてがEUの公用語と定められています。こうした政策的背景のもと、複数の言語に囲まれつつも自らの母語を大切にするEU市民の言語観を学ぶとともに、私たちにとっての母語や外国語の意味について議論しました。

### ●第3回「世界における英語の地位と価値について考える」

英語に内在する支配的イデオロギーを取り上げました。特に英語が国際語として広く話されることの利便性と同時に、そこに潜む負の側面についても検討しました。さらに日本人の英語学習者がネイティブ志向を強く持つあまり、自分たちの英語に自信が持てないという課題についても議論をしました。

### ●第4回「なぜ私たちにとって英語は難しいのか？—第二言語習得」

明治学院大学教授の新多了先生をゲスト・スピーカーとしてお招きし、ご講演頂きました。第二言語習得を困難にしている6つの要因（生物学的、言語的、環境的、社会的、認知的、心理的要因）についてご講演頂き、履修者は自分たちにとってどの要因が一番大きいか、またそれをどう克服するかについて分析しました。

●第5回「共通の言語教育・学習・評価の枠組みを目指して—CEFR」

第4回に引き続き、新多先生にご講演頂きました。第二言語教育をテーマとして、第二言語能力とは何か、また伝統的な外国語学習観とCEFRの学習観についての違いと学習におけるMediation（仲介）の重要性についてご講演頂きました。

●第6回「複数の言語を学ぶ利点とは？」

複数の言語を話すことが私たちの脳にどのような刺激を与えるのか、認知科学の観点から考えました。クラス全体でスループ課題やトロッコ問題、だまし絵などの実験の簡易版を行い、自分たちがどのような思考をしているかを体感し、さらに複数言語を操るようになると思考がどう柔軟に変化するのかについて考察しました。

●第7回「ことばと思考—言語が変われば世界の見方も変わる」

ある事象を描写する際に、何に着目し、何を言語化するか（あるいはしないか）について、ヨーロッパ諸言語に見られる文法的性、日本語の終助詞、英語やその他の西欧言語における単数・複数の区別などを例に挙げて、言語ごとに異なるものの見方や表現の仕方を考察しました。また、外国語における視点や表現方法を知ること、改めて自分の母語における視点や表現方法の特徴に気づく点について議論しました。

●第8回「多様な非言語コミュニケーション」

異文化体験などのことばの通じない状況で私たちが頼りにするジェスチャー、表情、目線、うなずきなどの非言語コミュニケーションを扱いました。ある言語文化で肯定的な意味を持つ仕草が別の言語文化では真逆に受け取られてしまう例を複数あげ、世界共通の意味を持つジェスチャーや仕草が存在しないこと、さらには自文化の解釈を基準に他文化を理解するのではなく、多様な解釈の在り方を理解する必要性について考察しました。

●第9回「文化の接触と言語の死」

世界に存在する7000言語のうち、その多くは話者の少ない「小さい言語」であり、今世紀末には全言語の90%が消滅または危機的状況に陥るという統計があります。これをもとに言語消滅の背景とプロセス、さらに言語が失われることの意味について考察しました。自らの言語を消滅させ、英語やスペイン語などの大きい言語を話せざるを得ない少数民族の現状を取り上げ、改めて自分たちの母語を守る意義を議論しました。

●第10－13回「プロジェクト：ディスコース分析から見る日本語会話のスタイル」

学期末のプロジェクトとして、日本語会話のディスコース分析を行いました。本プロジェクトはCEFRで重視されている言語や文化の「仲介活動」として位置付けています。履修者の多くにとって母語である日本語の会話を対象とし、いくつかの言語資源（発話

の繰り返し、重複、言い換え、問いかけ、あいづち、文末表現など)に着目して、その出現頻度や会話内での機能を分析しました。また英語の会話との比較を通して、日本語会話の特徴やその根底にある文化的価値観を考察し、それをどのように他者へ伝えられるかをグループで討論しました。日常的に行っている母語の会話スタイルを客観的に理解することで、他言語の特性をよりの確に捉えられ、外国語学習における習得の促進にもつながることを期待しています。

## ●第14回「まとめ」

1学期間で扱ったテーマを振り返り、最後に改めて、外国語を学ぶことの意義や、自分がどう学習し、社会にどう貢献したいかを考えました。

## 学生の積極的な参加を目指して工夫した点

本科目は、その名称が示す通り「なぜ外国語を学ぶのか？」という根源的な問いを出発点に、履修者一人一人が外国語学習の意義を考え、学習を通して身につけた能力をどのように社会での活動へ生かすかを考察することを目的としています。また、外国語学習への動機づけを高めることも重要な狙いの一つです。そのため、教員による一方的な講義ではなく、学生が自らの意見や経験を共有し、少人数グループやクラス全体で議論を重ねることで新たな知見を得る活動を重視しました。大人数の授業でも円滑に活動できるよう、毎週次の方法でグループを編成しました。

- ①グループ番号の記載されたカードを用意する。グループは28グループ、各グループは4名前後。
- ②授業開始前にカードは教室入口にセットし、学生は入室時にランダムにひく。
- ③教室内にはグループ番号が書かれた札を設置する。学生はカードに書かれた番号の席に移動し、同じグループに割り当てられたクラスメイトと共に着席する。

この方法で毎週グループを編成し、授業の冒頭で簡単な自己紹介を行った後、様々なグループ活動を行いました。毎回グループメンバーが変わることで程よい緊張感が保たれ、授業内の私語も少なく、落ち着いた雰囲気ですべての学生が授業に取り組む様子が見られました。

大人数クラスでのグループディスカッションやグループワークは私自身にとっても初めての試みであり、実際にうまくいくかどうか不安がありました。しかしいざ行ってみると学生たちが生き生きとした表情で意見交換をし、時に笑い合う声も聞かれ、楽しみながら互いに学び合っていることを実感できました。学期末に行った履修者アンケートにも、グループ活動について「刺激的だった」、「新たな視点を得られた」、「積極的に参加できた」といった肯定的な声が多数寄せられ、学生が他の履修者との協働的学習に手応えを感じていることがわかりました。私自身も学生の発言に「なるほど！」と思わさ



グループ分けカード（上）と、卓上用の札（下）

れることが多く、グループ活動を見守る中で学生と共に理解を深める機会を持てたことに感謝しています。

## 今後の展望

初年度の講義を無事に終え、来年度以降の課題も明確になりました。今年度の経験を基に、大人数のクラスにおいてできるだけ多くの学生が発言し、「授業に貢献できた」という達成感を得られるようにするには、どのような活動が効果的かを現在検討しています。また、Canvas LMS などを使った学生一人一人へのフィードバックも引き続き大切にしていきたいと考えています。その一方、今年度において特に効果を感じたグループディスカッションやグループワークについては、さらに内容を充実させ、来年度以降も継続して実施したいと考えています。

本科目がこのように充実した学習機会となったのは、授業に積極的に参加し、ディスカッションやグループワークを活発に盛り上げてくれた学生の力によるところが大きいと感じています。外国語学習、世界の言語文化、異文化コミュニケーションといった分野に高い関心を持つ本学の学生が、互いに協働しながら学びを深められる環境を今後も整えていきたいと考えています。

まち さえこ